

2025.12.28.

虹の契約」

旧約 創世記 9章1～17節

新約 ペテロの手紙I 3章18～22節

1. はじめに

2025年最後の主の日の礼拝を捧げています。まだクリスマスの余韻の中で歩んでいる私共です。教派によって少し違いますけれど、伝統的には1月6日のエピファニー、顕現日とも言いますが、イエス様が世界の王であることが現れた日、東方の博士がイエス様を拝みに来た日とされ、この日までがクリスマスのシーズンとされています。ですから、アドベント・クランツはさすがに片づけますが、まだ慌ててクリスマス・ツリーやクリスマス・リースを片づける必要はありません。もっとも、私が洗礼を受け育った教会では、クリスマス・ツリーを飾るのはクリスマス礼拝の一日だけ、クリスマス祝会が終わると片づけていました。イブ礼拝もありませんでした。改革派・長老派というのは、教会の暦を否定した伝統がありますので、そのようなことになっていたのでしょう。しかし、クリスマスの意味も良く分からぬままにクリスマスが世間のイベントとして定着した日本においては、そもそもいかなくなつたというところでしょうか。私共の教会においては、イブ礼拝というのは伝道礼拝という位置づけをしています。

さて、今朝は12月最後の主の日です、旧約の創世記9章から御言葉を受けてまいります。前回11月の最後の主の日に創世記の7章、8章から御言葉を受けました。今朝はその続きです。全世界を覆った洪水の水は引き、ノアとその家族、そして動物たちが方舟から出て、新しい歩みが始まっていくところです。

2. 神様の祝福と共に：「生めよ、増えよ、地に満ちよ」

神様はノアとノアの家族、そしてツガイの動物たちが方舟から出て新しい歩みを始めるに当たって、「**生めよ、増えよ、地に満ちよ**」(1節)と祝福されました。私共の命は、この神様の祝福、命の祝福によって与えられた。このことをしっかりと受け止めなければなりません。命というものは、私共ができるものではありませんし、私のものでもありません。神様の祝福によって与えられた、神様のものです。ここに、命の意味、命の価値というものがあります。

若い方は「私は子どもは二人まで、或いは三人までしか作らない」とか言いますけれど、この言い方には命というものに対しての大きな間違い、了見違いというものがあるように思います。子どもは「作る」ものではなくて「与えられる」ものです。しかも、神様の祝福によって与えられるものです。どんな子であっても、神様が祝福して与えてくださいました。ですから、私共は感謝と畏れをもって、与えられた子を精一杯愛情を注いで育みます。それは、五体満足であろうと、障礙を

もって生まれてこようと、同じことです。人は様々な価値判断を持って、人を評価します。その判断基準は、時代や、地域によって違うでしょう。しかし、この神様の命の祝福は、人間のどんな価値判断をも退けるほどに重大なものです。生まれてきた子は、みんなこの神様の命の祝福をまとめて生まれてきました。私共夫婦には、一人娘だけが与えられました。何人でも与えられたら良いと思っておりましたけれど、実際に与えられたのは一人でした。神様がどのようなご計画をお持ちだったのか分かりませんけれど、結果的には一人でした。それは「一人しか生まれなかった」ということではなくて、「一人が与えられた」という神様の祝福に満ちた、喜びの御業でした。今、孫が与えられまして、神様は我が子をも祝福してくださったと、神様に心から感謝し、毎日「神の子・僕として健やかに育まれていくように」と祈っております。神様の命の祝福は、自分の子や孫にだけあるのではありません。全ての命に注がれています。そして、私共がはっきり弁えておかなければならぬことは、私共自身の命もまた神様の祝福と共にありますということです。私共は、自分の命を自分のものであるかのように思い違いしてはならないということです。私共の命は神様の祝福によって与えられたのですから、この地上での生涯が閉じられるまで、神様の命を生き切る責任があります。年を重ねていきますと、昨年まで出来出来が出来なくなってくる。体のあちこちが痛む。物忘れが激しくなっていく。色々あります。それでも、神様の祝福の中に私共は生かされています。神様が祝福をもって「今日も生きよ」と告げられ、必要な全てを備えてくださっているからです。このことをキチンと受け止めましょう。

3. 命は神様のもの

「**生めよ、増えよ、地に満ちよ**」という神様の祝福は、創世記 1 章 28 節において神様が天地創造をなさって 6 日目に人間を造られた後に言われて言葉と同じです。1 章においては、その後に他の生き物を支配することを神様は人間に命じられました。ここでも、他の生き物を神様は人間に委ねられるのですが、1 章とは明らかに違うところがあります。それは、植物も動物も食べて良いといわれていることです。1 章で食べることが許されたのは植物だけです。神様は植物以外のものも食べて良いといわれましたので、私共は鳥も豚も牛も何でも食べて良いわけです。仏教ではあらゆる命あるものの「命を奪う」ことを「殺生」といい、仏教の戒律の中では最大の罪として、最も強く禁じてきました。日本文化の中に、この観念は深く根付いていると思われます。私が最初の任地の東舞鶴教会時代、何か趣味をもつた方が良いということで、赴任して 10 年目から「釣り」を始めました。すると、私の母が「神様に仕える身でありながら、殺生することを趣味して良いのか」と言うのです。私は「キリスト教では、殺生というのは無い。釣ってきた魚は感謝して食べれば良い」と応えますと「へーっ、そうなんだ」と驚いていました。

ここで大事なのは「釣った魚は、感謝して全部食べる」ということです。それは魚の命も、命は神様のものだからです。それが 3 節、4 節で告げられていることです。「**9:3 動いている命あるもの**

は、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。 9:4 ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。」ここで、魚も捕りも動物も食べて良いのですけれど、「血を含んだまま食べてはならない」と告げられていることが大事です。これは「ちゃんと血抜きをしないと美味しいくない」という話ではありません。聖書において「血」というものは、命の象徴として用いられる言葉です。ですから聖餐において「キリストの血」としてブドウ汁を飲むのです。ユダヤ人達は、今でも血抜きというものを徹底して行っています。しかし、聖書が告げているのは、「血抜きをちゃんとしろ」というようなことではありません。肉は食べても良い。しかし「血」によって示される命は神様のものだから、神様に返さなければならないということなのです。動物もみんな、神様の祝福を受けて、この地上に命を与えたものだからです。ですから、この命に対して「畏れと感謝」をもって、その肉をいただくということです。ですから、キリスト者にとって、「食前の祈り」というものはとても大切です。食事をする前に、神様の祝福によって与えられた命の肉をいただくわけですから、神様に畏れと感謝をもって祈る。そうして、食事をいただくということです。

4. 人間の命は特別

ここで、だったら「人間の命」はどういうことになるのか?他の動物と同じ価値、同じ意味があるのか?「全ての命は、平等だ」と言う人がいますが、私はこのようなことを言う人の言葉全く信用しません。嘘つきだからです。だったら、毎日、肉を食べ、魚を食べ、お米を食べているあなたは何者なのか?更に言えば、我が子が殺されることと、鳥が殺されて食卓に上ののと同じか?同じはずがありません。聖書は人間の命と他の生き物の命を全く違うものとして扱います。それが5節6節です。「9:5 また、あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する。」魚釣りをして魚を食べても、罰せられることはありません。しかし、人間に対しては「命の賠償」を要求すると神様は告げているわけです。そして6節「9:6 人の血を流す者は／人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ」と告げるわけです。人の血を流す者には、同じように血を流させる。つまり、「目には目を、歯には歯を」です。当たり前ですね。人間の命と鳥や豚の命は違う。理由はこう述べられています。「人は神にかたどって造られたからだ」つまり、神様にかたどった人間を殺すということは、神様を殺すようなこと、神様への反逆であって、それは放っておいてはならないことだ。そう告げているわけです。これが後に、十戒における第6の戒め「あなたは殺してはならない」になっていくわけです。

5. 契約

ここで神様は契約を結ばれます。この時の契約は「ノア契約」と呼ばれます。聖書に出てくる最

初の契約は、アダム契約（エデンの園で知恵の木と命の木以外の実は何でも食べて良い。しかし、知恵の木の実を食べてしまったアダムは生涯働かなければならなくなり、死ぬ者となった。）です。この次にあるのがこのノア契約です。そしてこの後、アブラハム契約（あなたを大いなる民とする。あなたを祝福の源とする。）があり、シナイ（モーセ）契約（モーセに率いられたイスラエルの民がシナイ山で十戒を与えられて結んだ契約）、更にダビデ契約（ダビデの子孫が永遠に王座に就くという契約）、そしてそれらの契約の集大成として、イエス様による契約へとなっていくわけです。他にもありますが、中心的なのはこれらの契約です。契約というものが聖書を貫いている大切な事柄です。ですから、旧契約聖書、新契約聖書、約して新約聖書、旧約聖書と呼ばれるわけです。

このノアの契約と呼ばれる契約は、神様はノアと契約を結んだわけではありません。ここが面白いところです。9節「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。」と告げられました。「あなたたち」というのは、ノアとその家族です。そして、神様はそのノアの子孫たちとも契約を結ぶというわけです。ノアの洪水で、ノアとその家族以外は皆滅んでしまったですから、その後の子孫というのは、その後の全ての人類ということになります。イエス様を知らなかったときの私共も含まれます。それどころが、人間だけではありません。10節「9:10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。」生きとし生けるもの全てです。これが神様の契約相手でした。鳥や獣に契約なんて分かるはずもありません。しかし、神様は契約したんです。それは、契約という言葉を使っていますけれど、その内容を考えれば「宣言」と言って良いでしょう。その内容はどういうものかと言いますと「9:11 わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」つまり、二度と全てのものを滅ぼすような洪水を起こすことは無い。全てのものを滅ぼし尽くすことはしない。そういう宣言でした。このノア契約によって、世界は大変な事態を何度も経験しましたけれど、滅ぼし尽くされることは無く、現在に至っているわけです。

「ノア契約なんて自分は知らない」と多くの人が言うでしょう。それはそうです。私も知りませんでした。しかし、知つていようと、知つていまいと、このノア契約のもとにこの世界はあり続けているということなのです。それはちょうど、我が子が生まれたときに、神様の祝福によってだと知らなくても、すでに我が子は神様の祝福の中にあったのと同じです。この神様の恵みの宣言、恵みの契約、恵みの約束。これを神様は決して忘れていません。私共は「自分が知らないことは、存在しないことだ」と思つてといふかもしません。しかし、神様というお方、神様の恵みの意思というものは、私共が知つていようと知つていまいと、この世界が存在する限り、変わることなくあるわけです。そして、私共はこの神様の恵みの宣言の中で生かされているということです。

6. 契約のしるし：虹

そして、神様はこのノアの契約、恵みの宣言を忘れることが無いようにと、虹を置かれました。虹はきれいです。虹を見ると、何か素敵な、特別なものを見たように嬉しくなります。この虹というのは自然現象ですから、場所によって見える頻度が違います。最近は、天気予報に虹指数というのがあって、今日はここで虹が出そうですということまで分かるようです。ちなみに、ハワイで伝道していた知人に聞いたところ、ハワイではほとんど毎日のように虹が見られるそうです。

この虹を見てこの契約を思い起こされるのは神様です。16 節「9:16 雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。9:17 神はノアに言われた。「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」神様は虹を見る度に、ノアを始め生きとし生けるものと結んだ契約を思い起こすと言われます。確かに、虹を見て全ての生きとし生けるものが、神様の恵みの契約を思い起こすことは無いでしょう。しかし、神様は思い起こされます。そして、神様の恵みによって神様の子・僕とされた私共は、神様と一緒に思い起こします。そして、感謝するでしょう。虹だけではありません、我が子を見る度に、孫を見る度に、また、父や母を思い起こす度ごとに、神様の祝福の御手の中に自分も、家族もみんな置かれている。そのことを思い起こします。

この神様との契約というものを大変重んじたのが、私共改革派・長老派です。この会堂にもそのことが現れています。それは、この講壇のアーチです。このアーチは虹を現していると言われます。私共はハワイに住んでいる人のように、いつも虹を見ることはありませんけれど、毎週、ここに集う度ごとに、虹を思い起こし、恵みの契約の中に生かされていることを覚え、御言葉を聞きます。どんなに厳しい、激しい御言葉も、この決して滅ぼし尽くすことは無いという、恵みの契約に基づいて聞くわけです。

7. イエス様の陰府下り

ところで、ノアの洪水において死んでしまった人たちは、どうなったのでしょうか。そのことについて、聖書では一ヵ所だけ告げているところがあります。それが先ほどお読みしました、ペトロの手紙 I 3 章 19.20 節です。「3:19 そして、靈においてキリストは、捕らわれていた靈たちのところへ行って宣教されました。 3:20 この靈たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。」ここで、イエス・キリストは十字架にお架かりになって死んだわけですが、その時、「キリストは、捕らわれていた靈たちのところへ行って宣教されました」と告げています。イエス様が宣教されたということは、救いの可能性があるということでしょう。イエス様を知らず、それ故悔い改めて洗礼を受けることも無かった人たち。そのような人たちを私共たくさん知っています。私の父も洗礼を受けること無く、地上の生涯を閉じました。母は分からぬなりに、洗礼を受けて、私が葬式の司式をしました。キリスト者になることのなか

った皆さんの両親や家族はどうなるのか？それについて、「救われない」と断言することは出来ないと私は考えています。イエス様が陰府において宣教されたのですから、救いの道は完全に閉ざされたわけではない。勿論、それでも救われると断言することは出来ません。私共は救ってくださることを願い、それも神様にお委ねしなければならないのでしょうか。

8. 罪→裁き→滅び・救い→新しい世界

さて、アダムとイブに始まる人類の歴史を、ここまでざつと思い起こしますとこうなります。アダムとイブが罪を犯し、失楽を追放され、与えられた二人の息子カインとアベルは兄弟殺しをしてしまいます。そして、その子孫が世界に広がり、悪が世界にはびこりました。神様は、それで洪水を起こし、ノアとその家族、それとツガイずつの鳥や動物をだけを残し、全てを滅ぼされました。そして、その洪水を免れたノアとその家族から新しい世界が始まりました。しかし、その新しい世界において人類は自らの罪を制御できず、世界はしばしば混沌としました。しかし、まだ滅んでいません。神様は、滅ぼし尽くさないと約束されたからです。そして、人類が新しい歩みをすることが出来るように、時満ちるに及んで決定的な救いの御業を為されました。それが、イエス・キリストの誕生・十字架・復活・昇天という出来事でした。アダムからノアまでの流れは、このようにまとめることが出来るでしょう。「人間の罪→神様の裁き→人間の滅びと救い→新しい世界の始まり」これと同じことが、イエス様によって決定的な方で私共にもたらされました。私共は、イエス様の十字架の御前に立つとき、徹底的に裁かれます。自らの罪を隠しようも無くあばかれ、赦しを求めるしかありません。しかし、そこで徹底的な赦しを与えられます。そして、新しくされます。神の子、神の僕としての新しい歩みがそこから始まります。失敗することもあるでしょう。でも、何度でもやり直せばいい。主の日の度ごとに、ここに集って、主イエス・キリストによって与えられた決定的な神様の恵みの契約に生かされていることを思い起こせば良いのです。この恵の契約は、私共の罪によって壊れてしまうようなヤワなものではありません。神様をなめてはいけません。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

2025年最後の主の日も、あなた様の御前に集い、愛する兄弟姉妹と共にあなた様を礼拝することが出来まして、まことにありがとうございます。ノアの契約の御言葉から、私共が、この世界が、あなた様の命の祝福と恵みの契約の中にあることを知らされました。どうか、このあなた様の搖るぎない恵みと祝福を受けて、私共も、私共が愛する一人も生かされていることを心に刻み、あなた様を信頼して、一日一日を歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン